

大学生における水泳および水辺活動に関する実態の検証 2016年度春学期生涯スポーツ理論実習の履修者を対象として

加藤 譲*1, 村山 勝*1, 鉄多加志*2, 合志明倫*2, 一ノ瀬一世*1, 鏑間 萌*1, 上田正道*3

Investigation on Experiences of Swimming and Waterfront Activities of College Students Targeting the students in Lifelong Sports theory and practice classes for 2016 spring term

Joe KATO, Masaru MURAYAMA, Takashi TETSU, Akinori GOSHI,
Kazuyo ICHINOSE, Moyuru SHIKAMA, Masamichi UEDA

Abstract

The purpose of this study was to investigate the experiences of swimming and waterfront activities of the students in Lifelong Sports Theory and Practice classes for 2016 spring term. The subjects were 472 students (99 females and 373 males with mean age of 18.23 ± 0.54 years old). The questionnaire collection rate was 100%, and the valid response rate was 94.7%. This questionnaire was composed of following questions: whether or not students have taken any swimming lessons in elementary, middle, and high schools, the types of swimming lessons they took, the time when they had last swimming experiences, the swimming distance by crawl and breaststroke on self-assessment, whether or not they have experienced some type of waterfront activities, whether or not they have played any of 15 types of sports, and their preferences on playing 15 types of sports in future classes. Cross-sectional analyses were conducted on baseline questionnaires on swimming lesson experiences and waterfront activities. The results of this study were as follows: 1) The higher the education, the fewer the percentage of swimming lesson experiences. 2) About 60% of the students have not swum for more than one year. 3) About 50 students declared that their longest swimming distance was less than 25 m. 4) The number of students who have experienced marine sports was less than half of the number of the students with waterfront activities experience. 5) Marine sports accounted for the sports that the students want to do in class from now on. It was suggested from the investigation that the findings were important materials for classroom management, and understanding the actual experiences of the students was necessary in order to improve classes.

水泳, 水辺活動, マリンスポーツ, 経験

Swimming, Waterfront activities, Marine Sports, Experience

諸言

2016年リオデジャネイロオリンピックにおいて、獲得したメダルの41個中、水辺活動としてあげられる水泳・競泳、水泳・シンクロナイズドスイミング、カヌーで獲得したメダルは10個であった。また、2020年東京オリンピックにおいては、追加種目として、サーフィンが選ばれた。これらは、周囲を海に囲まれた国として、海洋性スポーツ・レクリエーション愛好家だけでなく、日本で暮らす人たちの多くに海の魅力を伝える絶好の機会と言える。

学習指導要領では、小学校（文部科学省、2016）、中学校（文部科学省、2016）、高等学校（文部科学省、2009）において、各教科の体育もしくは保健体育の内容として、

水泳を明記している。小学校では、水遊び、浮く・泳ぐ運動、水泳と発展し、適切な水泳場の確保が困難な場合以外は教材として取り扱われている。また、中学校では、中学第1、2学年のどちらかの学年で、すべての生徒に履修させるように取り扱われ、第3学年になると、他の内容を含めて、4つの内容からの選択として取り扱われている。そして、高等学校では、中学校第3学年と同様に、他の内容の中からの選択として取り扱われている。このことから、小学校から高等学校に進むにつれ、他の内容との選択により、水泳を授業の内容として取り扱われる機会が少なくなる可能性が推測される。

さらに、小学校（文部科学省、2016, p. 8）、中学校（文部科学省、2016, p. 11）および高等学校（文部科学省、2009, p. 73）での内容の取扱いにおいて、「自然とのかかわりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、地域や学校の実態に応じて、積極的に行うことに留意するもの」と学習指導要領に明示されている。

2017年1月19日受付 2017年3月6日受理

*1 東海大学清水教養教育センター（Liberal Arts Education Center, Shimizu Campus, Tokai University）

*2 東海大学海洋学部海洋フロンティア教育センター（Marine Studies Frontier Education Center）

*3 株式会社 AQEA CLUB

次に、学校期別における過去1年間に「よく行った」運動・スポーツ種目の年次推移（笹川スポーツ財団，2014）を調査した結果を見ると、水泳（スイミング）の順位は、2011年において、小学校期で3位に、中学校期で5位に位置し、高校期では10位以内に入っていない。2013年においても同様に小学校期、中学校期では、水泳（スイミング）は10位以内に位置しているが、高校期では10位以内に入っていない。学校期が進むにつれ、水泳（スイミング）を行うことが少なくなっていることがわかる。

さらに、小学生教職課程大学生を対象とした泳力向上を検討した研究（天野ほか，2009）では、事前アンケートによる自己評価における持続泳距離の結果から5m未満と5m以上25m未満と回答した学生が全対象者の約40%と報告されている。

これらのことから、大学生において、小学生年代、中学生年代には泳ぐことを行っていたが、高校生年代では泳ぐ機会から遠ざかっていることが推測される。

そのようななか、海洋学部在籍の学生は、必修科目の授業として、海洋実習（3回）や体育科目で洋上に出る機会があり、さらに、それぞれのライフスタイルのなかに、水辺活動に触れ合う機会が多いと考えられる。海洋学部の状況を踏まえ、生涯スポーツ理論実習において水辺活動を中心とした実技を展開している。

これまでに、本学においても一般体育に関する研究は数多く行われている（今村ほか，1984；今村ほか，1991；松本ほか，2006；内山ほか，2006）。なかでも、海洋学部生（松本ほか，2000）を対象にした研究においては、「海」をテーマにした授業内容と実践方法について報告されており、現在もその授業内容を根幹として授業が展開されている（松本ほか，2001）。しかし、海洋学部在籍する学生の水泳経験や水辺活動に関する調査についての研究は数少ない。

そこで本研究は、2016年度春学期生涯スポーツ理論実習の履修者を対象にし、大学入学までの水泳経験、水辺活動に関する質問紙による調査を行い、それらの実態を明らかにし、今後の実技および実習の教授方法の一助となることを目的とした。

方法

調査対象は、東海大学海洋学部在籍している学生で、2016年度春学期に「生涯スポーツ理論実習」を履修した学生（472名、男373名、女99名、年齢18.23±0.54歳）とした。調査にあたって、調査の主旨を口頭にて説明した後、集合調査法にて実施した。調査の内容は、小学生、中学生、高校生の学校期別における水泳を習った経験の有無とその形態（授業、定期、短期、その他）、最後に水泳を行った時期、自己申告でのクロールおよび平泳ぎでの持続泳距離、水辺活動の有無、15種目のスポーツ経験の有無、今

後15種目のスポーツを授業で行いたいのかの質問を設定した。水泳を習った経験の形態の回答は、複数回答を有りとし、授業以外の形態で定期的に習っていた場合は定期とし、短期間で集中して習っていた場合は短期とし、それら以外をその他とした。水辺活動においては、海浜での遊び経験、海で泳いだ経験、マリンスポーツの実施の有無を質問項目とした。15種目のスポーツは、本学清水校舎で開講しているスポーツの14種目（水辺活動6種目：水泳、カヌー、ウィンドサーフィン、サーフィン、ダイビング、フィッシング、屋内種目5種目：バドミントン、バレーボール、ハンドボール、バスケットボール、卓球、屋外種目3種目：ソフトボール、サッカー、テニス）と、ソフトボールと類似し、屋外種目で知名度の高いと考えられる野球とした。授業内容として採用した泳力チェックにて、実際に対象者をクロールおよび平泳ぎで泳がせ、2泳法どちらかで25m以上を泳ぐことができない対象者の人数を調査した。調査時期は、2016年4月であった。統計処理は、 χ^2 検定とし、IBM社製SPSS Statistics 23を用い、有意水準を5%以下とした。なお、調査結果は口頭の説明に同意した回答のみを採用し、調査票の回収率は100%、有効回答率は94.7%であった。

結果

1. 各学校期における水泳を習った経験の有無とその形態

水泳を習った経験があると回答した人数（以下、水泳経験ありとする）は小学校では430名（96.2%）、中学校では365名（81.7%）、高等学校では210名（47.0%）であった。水泳を習った経験がないと回答した人数（以下、水泳経験なしとする）は小学校では17名（3.8%）、中学校では82名（18.3%）、高等学校では237名（53.0%）であった。（Fig.1）。学校期によって、水泳を習う経験が異なる結果となった。小学校、中学校では水泳を習った人数が有意に多くなった。高等学校では水泳を習った有無において有意な差が認められなかった。

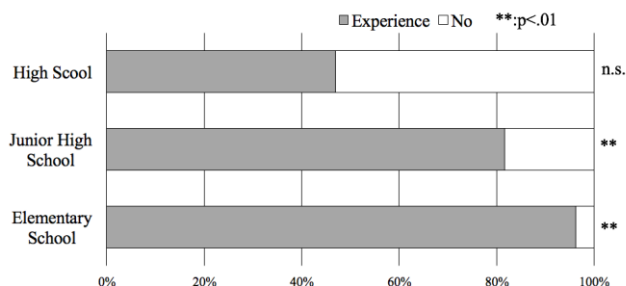


Fig.1 Whether or not students have taken any swimming lessons in elementary, middle, and high schools

水泳経験ありの習った形態（Fig.2）では、小学生では約60%、中学生、高校生では約90%が学校の授業で習ったと回答した。小学校では、定期的にスイミングスクール等に

通り、水泳を習ったと回答した人数が約 35%を占めた。

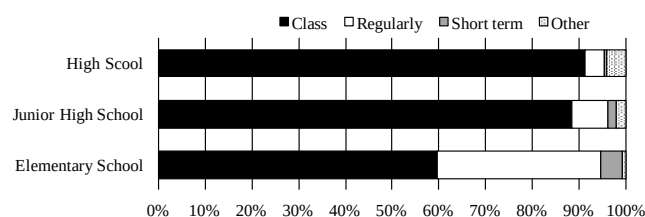


Fig.2 The types of swimming lessons they took

2. 最後に水泳を行った時期

最後に水泳を行なった時期を Fig.3 に示した。1 年以内に水泳を行った人数は 186 名 (42.2%) で、1 年以上 2 年未満では 81 名 (18.4%), 2 年以上前では 174 名 (39.5%) であった。水泳を行った時期が 1 年以上前である人数が 60%近くであった。

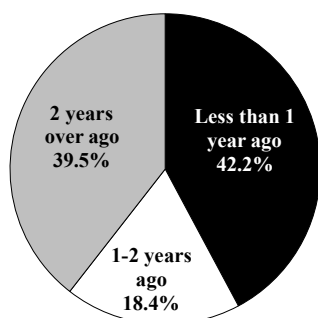


Fig.3 The time when they had last swimming experiences

3. 自己申告でのクロールおよび平泳ぎの持続泳距離

自己申告でのクロールおよび平泳ぎの持続泳距離を Fig.4 に示した。クロールの持続泳距離について、25m 未満と申告した人数は 33 名 (7.5%) で、25m 以上 50m 未満は 114 名 (25.4%) で、50m 以上は 300 名 (67.2%) であった。平泳ぎの持続泳距離について、25m 未満と申告した人数は 48 名 (10.7%) で、25m 以上 50m 未満は 88 名 (19.5%) で、50m 以上は 311 名 (69.7%) であった。両泳法とも 50m 以上泳ぐことができると回答した人数が約 7 割を占めた。また、25m 未満と回答した人数が約 1 割であった。また、クロールもしくは平泳ぎで泳ぐことのできた距離が 25m 未満であった人数は、67 名であった。

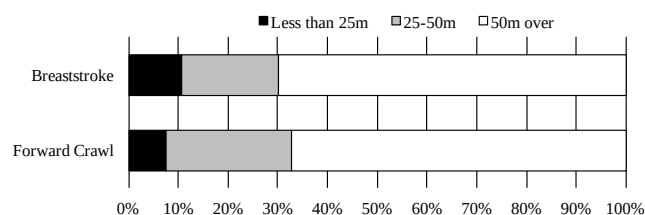


Fig.4 The swimming distance by crawl and breaststroke on self-assessment

4. 水辺活動

水辺活動について、Fig.5 に示した。海浜で遊んだ経験

(砂遊び、磯遊びも含む) について、あると回答した人数 (以下、経験ありとする) は 428 名で、ないと回答した人数 (以下、経験なしとする) は 19 名であった。経験ありは経験なしより有意に多い人数となった ($p<.01$)。海で泳いだ経験について、経験ありは 373 名で、経験なしは 74 名であった。経験ありは経験なしより有意に多い人数となった ($p<.01$)。今までにマリンスポーツを行った経験について、経験ありは 161 名で、経験なしは 286 名であった。経験なしは経験ありより有意に多い人数となった ($p<.01$)。

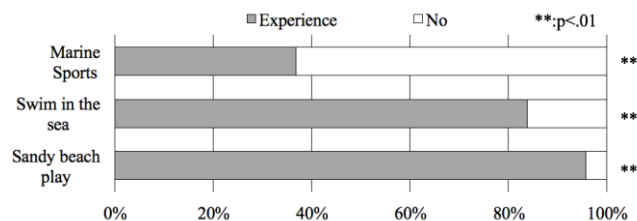


Fig.5 Whether or not they have experienced some type of waterfront activities

5. 15 種目のスポーツ経験の有無および今後授業で行いたいスポーツ

15 種目のスポーツ経験の有無について Fig.6 に示した。スイミング、ソフトボール、サッカー、卓球、バドミントン、バレーボール、バスケットボールを経験している人数が 8 割以上となった。水辺活動として最も経験していたのがフィッシングであり、次いでカヌーであった。スクーバダイビングでは約 15%, ウィンドサーフィン、サーフィンでは 10%にも満たなかった。

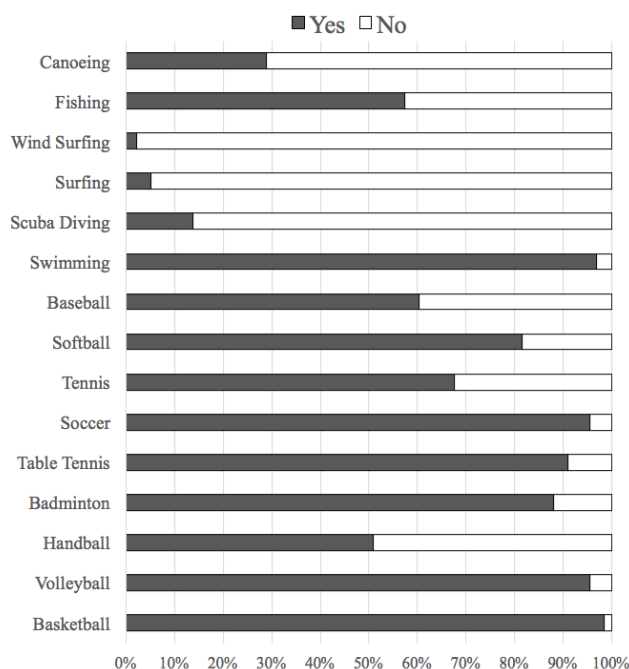


Fig.6 Whether or not they have played any of 15 types of sports

15 種目のスポーツについて今後授業での実施希望の調査結果を Fig.7 に示した。上位にスクーバダイビング、フ

イッシーグ、バドミントン、サーフィン、カヌー、バスケットボール、ウィンドサーフィンが占めた。今までに経験したことがない水辺活動であるスポーツが上位を占めた。

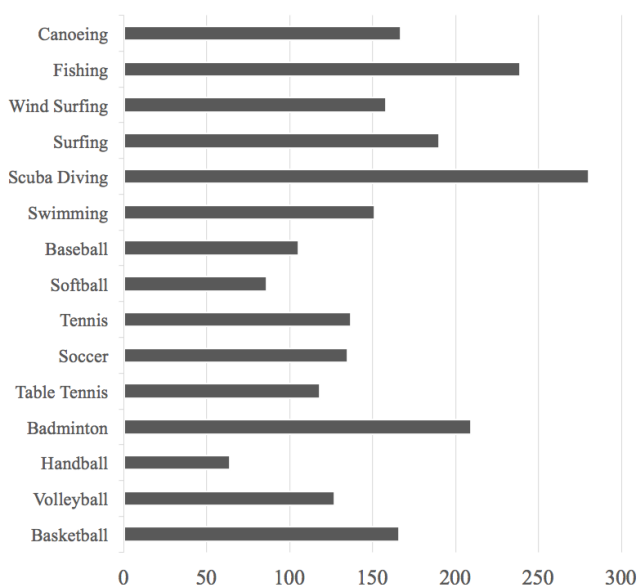


Fig.7 Their preferences on playing 15 types of sports in future classes

考察

学校期別における水泳を習った人数について、小学校期で最も多く、順に中学校期、高校期となった。この背景として、学習指導要領の内容から推測でき、小学校では水泳は必須であるが、選択できる内容となる中学校および高校では、体育の内容として、水泳を採用していないことが考えられる。また、水泳を習った形態について観てみると、小学校では約6割、中学校および高校では約9割が授業で習うことが明らかになった。授業以外での習った形態では、小学校では約3割が定期的に習っており、短期的に習ったことを含め、約4割となった。一方、中学校および高校では授業以外で習った割合が減り、1割弱であった。これらのことから、学校期別では、それぞれの学校期での実施が水泳の経験に影響することが考えられる。さらに、小学校期において、授業以外に定期的に水泳を習い、各種の泳法の習得を終えるため、中学校期、高校期において、授業以外で水泳を習う割合が少なくなると考えられる。

最後に水泳を行った時期を調査した結果、約6割の学生が1年以上泳いでいないこととなる。この状況で授業を展開するには、事前の準備もしくは実際の授業の実技についての配慮が必要であると考えられる。

このようなことから、実技の事前の準備として、授業開始から実技の実施まで約4週間の期間を利用し、受講学生に対し、最寄りのプール施設に行き、水慣れや泳法の確認を促すことが1つとして挙げられる。さらに、実技における配慮としては、泳力チェックを行う前に、泳ぎの基本技

術である水慣れ、呼吸、浮き身や泳法を確認する内容を組み入れることが挙げられる。要するに、実技を行う前に、泳ぐ機会を創ることが不可欠であると考えられる。

クロールと平泳ぎの持続泳距離を自己申告させた結果において、本研究とは男女比が異なるものの、先行研究（天野ほか、2009）では学生の約4割が5m未満もしくは25m未満であったと報告されていたが、本研究では先行研究とは異なり、両泳法とも25m未満であると申告した学生は約1割に留まった。先行研究の対象者は、小学校教員を目指す学生で将来水泳を指導するであろうことを考慮すると、本学部生は泳力に関して、泳げる意識を持っていることが推察される。また、泳げないと申告した回答を人数にすると、約50名の学生が25mを泳ぐことができないという意識を持っていることが明らかになった。これらの学生は、水辺での活動に関して、苦手意識を持ち備えていると考えられる。今後、追跡して調査することが課題として挙げられる。さらに、実際に授業を進めるなかで、泳力チェックを行った結果、クロールもしくは平泳ぎで泳ぐことのできる距離が25m未満であった人数は自己申告数を上回っていた。したがって、今後は主観的自己申告調査と並行して、泳力の計測を実施し、その差異を対象者および教員は把握することが必要であると考えられる。なぜなら、対象者は自己の泳力を再確認でき、泳力の向上の動機付けとすることができ、教員は授業を展開する上で、自己申告だけでなく実際に遂行できる泳力を確認することができるためである。

また、警察庁の発表資料（警察庁生活安全局地域課、2016）によれば、全国で発生した水難事故件数は1,450件で、うち死亡・行方不明者は791名であった。さらに、水難の死亡・行方不明者の場所別では、海が418名（52.8%）、河川が235名（29.7%）となり、全体の約8割であった。加えて、行為別では、魚とり・釣り中が226名（28.6%）と全体の3割となっている。このようなことから、本学部生の生活と関わりのある活動域および活動内容において、本学部生が事故から回避するために、本研究で実施した意識調査、実際の泳力チェック調査の継続を含む授業内容を継続することが必要であると考えられる。

浜辺で遊んだ経験や海で泳いだ経験について、8割以上、経験していた。しかし、マリンスポーツの経験となると、4割を切る数値となった。海で泳ぐこととマリンスポーツをすることの間にある要因を推測すると、家庭や立地環境、経済的な負担、安全性への不安が挙げられる。これらの要因を考慮すると、松本ほか（2001）が検討した海を多角的に捉えさせることと安全教育を中心とした体育授業は、マリンスポーツに繋がる可能性がある種目を採用しており、導入として最適であると考えられる。

15種類のスポーツ経験では、水辺のスポーツが少なかったが、今後授業で行ってみたいスポーツでは、水辺のスポーツが他のスポーツに比べ、多くなった。先行研究（今村

ほか、1984)では、未開講科目に対する履修希望について、対象者数 2562 名のうち、スクーバダイビングが 278 名、ウィンドサーフィンが 109 名、サーフィンを 119 名、カヌーが 67 名であったと報告されている。一方、本研究では、472 名中、スクーバダイビングを 260 名以上、ウィンドサーフィンを 150 名以上、サーフィンを 170 名以上、カヌーを 150 名以上が授業で行ってみたいと回答している。これは、本研究において、対象学生を海洋学部在籍学生としたことが要因と考えられ、学部の特性に合った回答であると考えられる。

結論

2016 年度生涯スポーツ理論実習を履修した学生を対象に、水泳および水辺活動についての実態調査を行い、検証した結果、学校期が進むにつれ、水泳を習う割合が少なくなること、約 6 割の学生が 1 年以上泳いでいないこと、約 50 名の学生が持続泳距離を 25m 未満と申告したこと、マリンスポーツを経験している人数は水辺での活動経験の半分以下であったこと、今後授業で行ってみたいスポーツはマリンスポーツが上位を占めたことが明らかになった。また、付嘱高等学校の水泳教育の影響と、海に興味を持っている学生が集まる海洋学部の学生を対象としていることが研究の限界であると考えられるが、本研究で実施した実態調査は授業の運営に関わる重要な資料となり、授業の運営をよりよくするためには、今後も引き続き、継続して実施し、学生の実態を把握することが必要であると示唆された。

引用文献

- 文部科学省 (2016) : 小学校学習指導要領, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm, オンライン資料, p. 8 (参照日:2017/2/17)
- 文部科学省 (2016) : 中学校学習指導要領, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm, オンライン資料, p. 11 (参照日:2017/2/17)
- 文部科学省 (2009) : 高等学校学習指導要領, p. 73.

参考文献

- 天野 秀哉・鋤柄 純忠・大山 康彦 (2009) : 水泳実習における大学生の泳力向上と授業認識に関する一考察 —小学校教職課程大学生を対象として—, 茨城キリスト教大学紀要, 自然科学, 43, 203-216.
- 今村修, 長谷川聖修, 古谷嘉邦, 安田武四郎, 松永尚久, 加藤弥生 (1985) : 一般体育実技に対する学生の意識の変容に関する一考察, 東海大学紀要. 体育学部, 15, 37-45.
- 今村修, 長谷川聖修, 植田恭史, 安田武四郎, 松永尚久,

- 工藤智子 (1991) : 一般体育実技に対する学生の意識の変容に関する一考察-第Ⅱ報-, 東海大学紀要. 体育学部, 21, 57-67.
- 内山秀一, 松本秀夫, 今村修, 山下泰裕 (2006) : 東海大学新入生の体力と今後の課題, 東海大学紀要. 体育学部, 36, 165-170.
- 警察庁生活安全局地域課 (2016) : 平成 27 年における水難の概況, https://www.npa.go.jp/safetylife/chiiki/h27_suinan.pdf (参照日:2016/11/28)
- 公益財団法人日本オリンピック委員会 (2016) : 日本代表選手団メダリスト・入賞者一覧, <http://www.joc.or.jp/games/olympic/riodejaneiro/japan/winnerslist/> (参照日:2016/11/14)
- 笹川スポーツ財団 (2013) : 青少年のスポーツライフ・データ 2013, 53.
- 松本秀夫, 内山秀一, 今村修, 山下泰裕 (2006) : 東海大学における体育選択科目の履修状況に関する調査, 東海大学紀要. 体育学部, 36, 155-164.
- 松本秀夫, 村山勝, 田中靖久, 渋谷聡, 中見隆男 (2000) : 体育選択科目における履修目的と必修科目の影響について-清水校舎における体育選択科目履修者を対象に-, 東海大学紀要. 体育学部, 30, 29-35.
- 松本秀夫, 村山勝, 田中靖久, 渋谷聡, 了海諭, 加藤淳, 佐藤延男, 中見隆男, 村上繁 (2001) : 海洋学部における「海」をテーマにした体育授業の検討, 東海大学紀要. 体育学部, 31, 7-17.
- 文部科学省 (2016) : 小学校学習指導要領, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm, オンライン資料 (参照日:2016/6/15)
- 文部科学省 (2016) : 中学校学習指導要領, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/index.htm, オンライン資料 (参照日:2016/6/15)
- 文部科学省 (2009) : 高等学校学習指導要領, 69-75.

要 旨

本研究は、2016年度生涯スポーツ理論実習を履修した学生を対象に、水泳および水辺活動についての実態調査を行い、検証することを目的とした。対象者は、472名（女子99名、男子373名、平均年齢 18.23 ± 0.54 歳）であった。調査票の回収率は100%、有効回答率は94.7%であった。調査の内容は、小学生、中学生、高校生の学校期別における水泳を習った経験の有無とその形態（授業、定期、短期、その他）、最後に水泳を行った時期、自己申告でのクロールおよび平泳ぎでの持続泳距離、水辺活動の有無、15種目のスポーツ経験の有無、今後15種目のスポーツを授業で行いたいかの質問を設定した。統計処理は、学校期別における水泳を習った経験、各水辺活動について、 χ^2 検定を行った。その結果、以下のようになった。1)学校期が進むにつれ、水泳を習う割合が少なくなること、2)約6割の学生が1年以上泳いでいないこと、3)約50名の学生が持続泳距離を25m未満と申告したこと、4)マリンスポーツを経験している人数は水辺での活動経験の半分以下であったこと、5)今後授業で行ってみたいスポーツはマリンスポーツが上位を占めたことが明らかになった。これらのことから、実態調査の結果は授業の運営に関わる重要な資料となり、授業の運営をよりよくするためには、学生の実態を把握することが必要であると示唆された。